

福武敏夫 著

神経症状の診かた・考えかた 第3版

General Neurology のすすめ

宮岡 等

評者は精神科医である。精神科医になって3, 4年目のころ、今から約40年も前になるが、身体疾患に起因する意識障害であるせん妄、認知症、統合失調症治療薬による錐体外路症状、心理面的原因で身体症状を呈する転換性障害などに出合っ、精神科医もある程度の神経内科（現在の脳神経内科）の知識が不可欠であると考えた。当時の私のバイブルは故・本多虔夫先生が単独執筆された『神経病へのアプローチ』（医学書院）であった。所属教室の主任教授に頼み、週1回程度であったが、しばらくの間、本多先生の下で研修を受け、臨床家はこうあるべきという姿勢も学んだ。

それ以後、自分が精神科教員の立場となり、わかりやすいテキストを探している中、みつけたのが本書である。著者は初版の序で「遺伝学や生化学などのいわゆる高度医療の側面には触れていない。それらを高速道路建設に例えると、本書は街中の交通渋滞^{まちなか}に対処するものである」、第3版の序では「『街中の交通渋滞対処』が『高速道路建設』に役立つ」、「予断や理屈に捉われないで、患者の症状を観察し、自ら一步深く考えることが今なお臨床医に求められている」と強調しており、評者が教えられてきた医療観を再確認させられた。

第I編では「日常診療で遭遇する患者」として頭痛、めまい、しびれ、肩こり、震え、物忘れなど、第II編では「緊急処置が必要な患者」として、けいれん、意識障害などを取り上げ、第III編では「神経診察のポイントと画像診断のピットフォール」とし

て診察のあるべき姿が述べられている。「常にこれだけは知っておくように」という趣旨の記載が随所にみられるのは著者の医療に対する姿勢の表れであろう。

もう1点、評者が賛同するのは「多くの教科書が分担執筆であったり、欧米の教科書の受け売りだったりするので、筆者一人による一貫したものの診かたを提示し、病歴聴取と神経診察の実際の経験をなるべく具体的に示したいと思ったことである」という執筆動機である。最近、分担執筆の本が多く、責任者不在を感じる場面が少なくない。内容に多少の濃淡はあっても、単著の出版を増やすように出版社にも努力して欲しいと思う。

最初に挙げた本多先生の本を思い出しながら本書を読んだ。40年も経ち知見が著しく増えているのでやむを得ないが、神経内科を専門としないが学びたい医師にとってはできるかぎり薄い本であって欲しいと思う。

いずれにせよ、脳神経内科の基本的な知識や診療姿勢が見事にまとめられた本であり、神経内科初心者だけでなく、総合診療医や精神科医、その他の内科を中心とする医師にとって極めて有用な書籍である。

（北里大名誉教授・精神医学）

● B5 440頁 2023年

定価：5,940円（本体5,400円＋税10%）

医学書院刊